

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32513

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770003

研究課題名(和文)ギリシア自然哲学の展開とペリパトス派的受容

研究課題名(英文)Development of Greek natural philosophy and its reception by the Peripatetics

研究代表者

松浦 和也 (Matsuura, Kazuya)

秀明大学・学校教師学部・講師

研究者番号：30633466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ソクラテス以前の自然哲学をアリストテレスらペリパトス派が受容した際の傾向性を、『生成消滅論』をはじめとしたテキストに現れるアナクサゴラスやエンペドクレスらの言及を手掛かりにして明らかにするものである。本研究の結果明らかになったことは、第一にアリストテレスは先行見解も観察事実も同じ「パイノメナ」の語によって支持するものの両者の扱いには差異があること、第二に残念なことにペリパトス派は先行する自然哲学的諸見解を整合的に解釈しようとする傾向は薄いということである。

研究成果の概要(英文)：This research aims to reveal Aristotelian or Peripatetic tendency of reception of the Presocratic natural philosophy by focusing on the their references to Anaxagoras and Empedocles in Aristotle's texts on natural philosophy such as the "Generation and Corruption". The outcomes are as follows: first, even though Aristotle uses the same term "phainomena" not only when he introduces preceding opinion(s), but also empirical observation, he apparently distinguishes both in his argument. Second, the Peripatetics have less tendency to interpret Presocratic opinions as consistently as possible.

研究分野：ギリシア哲学

キーワード：アリストテレス 哲学 科学史 自然哲学

1. 研究開始当初の背景

欧米圏におけるギリシア自然哲学研究の進展は目まぐるしいものがあり、優れた研究成果が日々公表されている。しかし、本邦の古代哲学研究は倫理学的分野に関心がやや集中し、それに比して自然哲学研究は発展途上の段階にあると言わねばならない。自然哲学研究をわれわれが重視しがたい理由は、ギリシア自然哲学を現代科学に接続させることが困難であることにある。たとえば、タレスの「水」概念やアリストテレスの四元素説が最先端の科学理論に有意義な知見をもたらすとはもはや考えがたい。しかし、研究代表者の目標は、古代の自然哲学、さらには古代ギリシアの哲学的成果を支える思考形態と暗黙の前提をテキストから取り出し、われわれ自身の思考のあり方を正当化しつつも、他の可能性を模索するための土台を提供することにある。本研究課題はその目標を達成するための一部分であった。

さて、昨今のソクラテス以前哲学解釈はペリパトス派的咀嚼を考察から除外する傾向にあるが、その理由は、ソクラテス以前の哲学思想の原型をペリパトス派の影響から隔離するためだと思われる。ただし、この理由は哲学思想に対するペリパトス派の理解が誤っていることを保証しない。しかし、ペリパトス派的咀嚼に完全に身を委ねる危険性の指摘は正当だと思われる。それゆえ、ギリシア自然哲学研究はソクラテス以前の哲学思想の解釈にペリパトス派的咀嚼をどこまで援用してよいか、という方法論的考察が不可欠である。だが、この考察が妥当であるには、個々の哲学思想の大部分の調査と解釈がすでに完了し、さらにペリパトス派的咀嚼が哲学思想の原型をどこまで意図的に歪めたのが、すでに判明でなくてはならない。このようなジレンマを、ソクラテス以前哲学研究およびアリストテレス自然哲学研究は方法論のレベルで抱えている。

2. 研究の目的

本研究はアリストテレスの『自然学』をはじめとした自然科学的著作とソクラテス以前の自然哲学、特にイオニア系哲学者の断片・報告の文献学的読解を基盤としながら、ギリシア自然哲学に共通する物体観と思考形態を析出し、また、アリストテレスの自然哲学の特色とイオニア自然哲学の特色を対比的に描き出すことを主要の目的とする。ただし、本研究はこのような成果に満足せず、イオニア自然哲学者とペリパトス派の積極的影響関係を暴くとともに、ソクラテス以前の哲学思想の研究が採用すべき方法論を明文化し、提案することも目標とする。

また、昨今のギリシア自然哲学研究では個々の哲学思想の影響関係が不明瞭であっ

た。のみならず、アリストテレスの自然哲学との関係の解釈も、アリストテレス解釈内部で行われがちであり、先行するギリシア自然哲学が与えた積極的影響の調査は未だ不十分である。それに対し、本研究は単なる比較思想研究に終わることなく、哲学思想の影響関係を明らかにする。さらに、歴史研究・文学研究の知見を考察に取り入れることにより、歴史の実像に即した新たなギリシア自然哲学理解と、学術的に妥当な研究手法を提案する。

3. 研究の方法

上記1末尾のジレンマは、ソクラテス以前の自然哲学思想およびアリストテレス自然哲学の理解を一步でも進め、かつペリパトス派が自然哲学思想をどのような媒体で受け取ったのか、その歴史の実情を把握することで解消されよう。それゆえ、本研究期間は、ギリシア自然哲学の中でもイオニア自然哲学に集中して、その内実とアリストテレスの応答を再構成しつつ、当時の学問的情報の流通を歴史学的視点から調査し、ペリパトス派によるイオニア自然哲学思想伝承の歪みの性質を明らかにする。この作業による成果は部分的ではあるが、そこからギリシア自然哲学の基盤となる物体観と、イオニア自然科学およびアリストテレスの自然哲学の特色を明確化することや、ソクラテス以前の哲学思想の研究方法を新たに提案することは十分に可能である。

なお、本研究の具体的遂行は3つの要素からなる。それぞれの作業は独立しているが、これらは研究全体から見れば相補的關係にある。(A) アリストテレス『自然学』『生成消滅論』『天体論』等に見られるイオニア自然哲学思想に対する批判の再構成。文献学的手法に基づきテキストを読解した上で、アリストテレスの哲学体系全体との整合性を考慮する。(B) 個々のイオニア系自然哲学思想の具体的内実の把握。個々の哲学者に直接関連する資料のみを典拠とするのではなく、それぞれの影響関係の可能性を視野に入れ、師弟関係など関係が深い哲学者の資料も典拠として用いる。(C) ギリシア古典期における学問的情報の流過程の調査。この調査には膨大な作業が必要なため、既存の研究成果を援用しつつ、下で記すような研究協力者と意見交換を行いながら遂行する。

4. 研究成果

本研究の成果は次のものである。第一に、先行見解の扱いに関し、彼らペリパトス派は自然哲学者の言説を可能な限り好意的に読解するような寛容さや、その言説と説明対象である自然現象との齟齬や、その言説内の内

部矛盾に際して、その齟齬や矛盾の解消を測るような解釈学的姿勢が希薄である。第二に、アリストテレスは自然哲学の遂行において、考察対象の観察とそこからの帰納を基盤としながらも、先行する自然哲学的言説の批判をすることによって弁証法的に議論を構築しているが、その弁証法的考察を可能にした手法のひとつは、彼が自然哲学者の言説を導入する際に、そのように理解すべき論拠を残さずに、過剰に一般化・全称化した命題としてその言説を解することにある。そのような一般化・全称化した命題を通じて、自然現象との齟齬や言説の内部矛盾は生成される。第三に、先行する言説の用い方として、『ニコマコス倫理学』をはじめとした著作で散見されるような方法、すなわち自身の学説の説得力を向上させるために、先行する見解を自身の学説から一定程度説明するような手段をアリストテレスは自然哲学的考察では採用していない。それゆえ、いわゆる「パイノメナ」を議論の出発点とするアリストテレスの考察方法は倫理的著作でも自然哲学的著作でも採用されていることはしばしば指摘されてきたが、その内実にはずれが見られる。第四に、パイノメナはそれが観察事実と解される限りは、それを真として扱い、学説が説明すべき対象としてペリパトス派は扱うが、それが通念である場合は、その真偽は除外視される。第五に、アリストテレスは自身の見解に反する見解は積極的に典拠を据えて取り上げるが、同調する見解の出典を挙げることはほとんどない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

松浦和也、アリストテレスの運動の定義、『物質・生命・人格をめぐる哲学と自然科学の交差に関する理論的および実践的研究(平成22年度～平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)』、査読無、pp. 42-53、2014年

松浦和也、パイノメナの構造—アリストテレスの方法論の一側面—、『葛藤と和解・主体と他者・普遍と多元』、査読無、pp. 38-48、2015年

松浦和也、(書評) G. Woehrle, ed., *The Milesians: Thales (Traditio Praesocratica, v. 1)*、『西洋古典学研究』LXIV、pp. 160-162、2016年

松浦和也、アリストテレスの自然哲学におけるパイノメナ、『秀明大学紀要』14、pp. 73-88、2017年

〔学会発表〕(計8件)

松浦和也、「クマーリラにおける個体と普

遍の非別異」へのコメント—アリストテレスの運動論的立場から—、シンポジウム「インドの大地が育んだ世界認識の枠組み」、2014年11月23日、東京大学本郷キャンパス

松浦和也、パイノメナの構造—アリストテレスの方法論の一側面—、全南大学・東京大学大学院生学術交流シンポジウム、2015年2月20日、東京大学本郷キャンパス

松浦和也、アリストテレスのパイノメナ第3回 PAP 研究会、2015年3月8日、三重大学

松浦和也、アリストテレスのミソジニーは体系的か?、第154回 PHILETH セミナー、2015年8月10日、北海道キャンパス

松浦和也、アリストテレスの経済思想再考」へのコメント、経済研究定例研究会、2015年11月27日、一橋大学

松浦和也、人文学に何ができるか、JST/RISTEX 研究調査事業「高度情報社会における責任概念の策定」第1回研究会、2016年11月24日、秀明大学

松浦和也、知性の無理解—アリストテレスのアナクサゴラス評、西洋古典研究会、2016年12月4日、日本大学文理学部

松浦和也、なぜ知らないことは責められないのか—アリストテレスの場合、JST/RISTEX 研究調査事業「高度情報社会における責任概念の策定」第4回公開研究会、2017年2月11日、秀明大学(千葉県八千代市)

〔図書〕(計2件)

松浦和也 他、理想社、理想 特集アリストテレス：その伝統と刷新、自然の諸相—アリストテレスの女性像を通じて、2016年、pp. 50-61

松浦和也、知泉書院、アリストテレスの時空論、印刷中

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

松浦和也 (MATSUURA, Kazuya)
秀明大学・学校教師学部・専任講師
研究者番号：30633466

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()